

## 第二章 「地方の時代」を拓く長洲県政の二〇年

### 第一節 長洲県政の誕生

1. 長洲県政を語る意味
  - 地方自治の可能性に挑戦した二〇年
  - 長洲県政を総括する意味
2. 政治家の三つの条件
  - 知事就任の日に丸山真男さん来訪
  - 政治家の三条件と長洲さん
3. 神奈川が変われば日本が変わる
  - 生みの親は飛鳥田横浜市長
  - 三つのWhy?（なぜ神奈川か、なぜ知事か、なぜ長洲か）
  - 神奈川で日本の問題を解く—「神奈川が変われば日本が変わる」

#### 1. 長洲県政を語る意味

##### ●地方自治の可能性に挑戦した二〇年

横浜国立大学経済学部教授だった長洲一二（ながすかつじ 当時五五歳）さんが神奈川県知事に当選し、長洲県政が誕生したのは一九七五（昭和五〇）年四月の統一地方選挙のときでした。そして、ちょうど二〇年目にあたる九五（平成三）年四月、自らの引退によって長洲県政は幕を閉じました。この間、「地方の時代」という新しい政治理念を提唱して一世を風靡し、その後の分権改革に大きな影響を与えたほか、高度成長期の圧力団体政治に代わる脱成長、脱工業社会時代の政治として「生活者政治」という新しい政治理念を打ちだし、自治、分権、参加型政治の追及、生活の量的充足から質的充実へのニーズや価値観の転換に対応する新たな政治テーマを模索しつつ、情報公開、プライバシー保護、環境アセスメント、地域福祉、女性政策、非核兵器県宣言などで全国都道府県の先駆けの役割を果たしました。

また、地方の自主、自立を目指して、それまで国の仕事とされてきた分野にもすすんで挑戦してきました。国際化時代に対応して外交への市民参加をめざす「民際外交」を始め、国の下請けから脱し、地域に根ざした自前の産業政策や科学技術政策、文化行政など、自治体とくに都道府県レベルでは初めての政策を次々に展開してきました。さらに、「地方の時代」や「生活者政治」などの政治理念の提起をはじめ、情報公開、プライバシー保護、環境アセスメント、女性政策などでは、むしろ国を先導する役割を果たすなど、地方自治の歴史に大きな足跡を残しましたが、自らの引退によって一つの時代に終わりを告げたのです。

##### ●長洲県政を総括する意味

そこで、地方自治の可能性に挑戦しつづけた長洲県政二〇年の歩みを総括し、これからの地方自治のあり方について教訓を引き出すことは大切なことだと思うのですが、長洲県政が終わって九年も

経つのに、これまできちんとした総括がなされていませんでした。知事の身近で働いていた私は当事者過ぎるので適任ではないと考え、誰かがやってくれればと思っていたのですが、情報公開、民  
際外交など個別テーマのものは別として、全体的なものはまだ誰もやっていません。最近  
は私の怠慢を責める声が聞こえるようになりましたので、私にも責任があるのではないかと  
考え、今回、非力を顧みず若い友人の提案を受け、「長洲県政の検証」作業に参加することに  
したわけです。

第一章で触れたように、私は長洲知事の誕生までは民間の研究所で働く一人の研究者に過ぎ  
なかつたのですが、長洲知事の強い要請により、一期目のスタートのときから四期終了ま  
での一六年間、知事直属の政策スタッフ—いわゆるブレン（アメリカ式に言えば「特別補佐官」）  
として長洲県政の主要政策の企画・立案と全庁的な政策調整、さらに知事の政治姿勢、  
政治スタンスづくりの仕事に携わってきました。したがって長洲県政を総括することは、  
私自身の人生の重要な一時期（四五歳から六一歳まで）を総括することにもなるわけ  
で、私にとっても重いテーマなのです。

## 2. 政治家の三つの条件

### ●知事就任の日に丸山真男さん来訪

本論に入る前に、ひとつのエピソードを紹介しておきたいと思います。今でもはっきり覚えて  
いますが、一九七五（昭和五〇）年四月二三日、長洲さんの初登庁の日の午後、横浜市企画調整局長  
の田村明さん（後に法政大学教授）から、丸山真男先生（当時東大名誉教授、故人）ご夫妻が、た  
また横浜にきておられ、できれば就任祝いを兼ねて長洲さんと食事をしたい、といわれている  
との連絡が入りました。初登庁の日で超多忙の日程のなか、しかも突然の連絡でしたのであ  
わてましたが、またとない機会でしたので、夕方市内の天ぷら屋で一緒することになり、い  
ずれも門下生の田村明さん、安東仁兵衛さん（「現代の理論」編集長 故人）と一緒に、私と  
蔵さん（知事秘書、私と一緒に県庁に入った）も同席させてもらいました。

その席で、丸山先生は政治家になったばかりの長洲さんに贈る言葉をいろいろ話されました  
が、今も印象に残っているのは、政治家として具えるべき三要件を挙げられたことです。第一  
はイデオロギーで、政治家はなによりもまず政治に対する思想や理念がしっかりしていなければ  
ならないということでした。第二がリアリズムで、理想、理念を現実化していくには冷めた現  
実主義による現実処理能力が必要だということでした。第三はパーソナリティーということ  
で、人柄とか人間的な魅力ということでした。政治家の政治力の根底には、こうした、敵  
対する人間をも感化してしまうような人間的な器量、うつわというものがある、というこ  
とだったと思います。

そして、この三つのうち一つか二つを具えている政治家は大勢いる。たとえば学者出身の  
政治家には素晴らしい理想、理念をもった人がいる。官僚やビジネス・エリート出身者には  
現実処理能力に優れた人たちがいる。人柄がよく、人間的な魅力でみんなに慕われている  
政治家もいる。しかしこの三つを一身に兼ね備えた政治家はめったにいない。一世紀に  
せいぜい数人だろうということ、話題になったのが、リンカーン、毛沢東、ネール、レー  
ニンといった人たちでした。そして「長洲さんも政治家を志された以上、立派な政治家  
になって下さい」といった話しをされたように記憶しています。

そこで長洲さんが感謝の言葉を述べ、今後のご指導、ご協力をお願いしたところ『丞相  
に親近せず』

(大臣など位の高い政治家と親しくしない)が私の主義なので、知事である長洲さんと会うのは今日が最後です」といわれたのには、長洲さんも私もびっくりしました。事実、その後二〇年間、長洲さんと丸山先生が直接お会いすることは二度となかったのです。いずれにせよ、大學教授から政治家に生まれ変わった日に、近代政治学の生みの親といわれる丸山先生からじかに伺ったいろいろな話は、長洲さんに大きなインパクトを与えたようでした。帰り際「政治家の三条件は心に沁みた。今日は素晴らしい一日だったね」といっていました。

### ●政治家の三条件と長洲さん

私の観察によれば、長洲さんは第一のイデオロギーについてはマルクス主義への造詣が深いばかりでなく、大学で思想史の講義をされていたこともあり、西欧思想の教養は大変深かった。既成マルクス主義の革新を求め、革新政治理論の再構築を目指す「構造改革派」の主要な論客の一人でもあった。そして知事就任の頃はマルクス主義から離れて西欧型のソーシャル・デモクラット（社会民主主義）の立場に変わっていたように思います。

第二のリアリズムですが、後に詳しくみるように、長洲さんはしたたかなりアリストでした。とくに一九七五（昭和五〇）年知事就任時の未曾有の財政危機のなかで、「学者出身の素人知事にはとても乗り切れまい」「すぐに投げ出すんじゃないか」という見方が広がるなかで、二年間で見事に財政再建を果たしたわけで、透徹したリアリズムがなければできなかつたと思います。

第三の点ですが、私は記者たちから長洲さんの人柄を問われたとき、いつも次のように話しました。「長洲さんの人柄は三本柱でできている。第一の柱は西欧的知性と教養である。学者としてマルクス経済学から近代経済学まで幅広く社会科学を研究してこられたので、この点では豊かな蓄積がある。第二は東洋的人生観である。長洲さんは仏典への造詣が深く、また中国の唐詩を自ら翻訳するほど好み、人生無常という東洋的人生観を抱いて生きてこられた。三つ目は、下町庶民的情感の持ち主である。貧しさのため一家離散するなど辛酸をなめながら、東京の下町で少年時代を過ごし、苦学しながら横浜高商（現横浜国大）、東京商大（現一橋大）に学ばれたので、下町の人情や情感が身に染み込んでいる」。

つまり、長洲さんの人柄の魅力は西欧的知性、東洋的人生観、下町庶民の情感の三つがバランスよく一身のなかに統合されていることではないか。大衆的人気の秘密もここにあるのではないか。こんな分析を記者たちに披露しました。これは我ながらよく出来た分析だと思っています。

## 3. 神奈川が変われば日本が変わる

### ●生みの親は飛鳥田横浜市長

ところで長洲知事の生みの親は、当時の横浜市長（このとき三期目）で全国革新市長会（一五〇市の革新市長が参加）の会長として革新自治体運動の先頭に立っていた飛鳥田一雄（元社会党代議士、後に同党委員長、故人）さんでした。一九七五年統一地方選挙の天王山ともいえる神奈川県知事候補として長洲さんに白羽の矢を立てた飛鳥田さんは、七四年七月、まずブレーンの鳴海正泰（企画調整局専任主幹、後に関東学院大教授）さんを使者に立てて自らの意向を伝え、感触を探ります。次いで八月初旬、自ら長洲さんを食事に誘い会談したのですが、長洲さんによれば飛鳥田さんは一

時間ほど一方的にしゃべり続け、「今日は返事は要りませんよ」といって帰って行かれたそうです。そして八月二六日、飛鳥田さんは長洲さんを鎌倉の自宅に、突然訪ねていきます。ここで五時間におよぶ攻防があったのですが、これが最大の山場だったようです。長洲さんはここで「三つの Why」を設問し、大分食い下がったようです。「なぜ神奈川か」「なぜ知事か」「なぜ長洲か」の三つでした。

当時、長洲さんはしばしばマスコミに登場する売れっ子教授であり、横浜国大の経済学部長も務め、学長候補でもあったわけですから、それを捨ててリスクの大きい知事選に立候補することにはかなりの抵抗感があったようで、みずから納得するにはどうしても「三つの Why」について得心のいく答えが必要だったのだと思います。

### ●三つのWhy？（なぜ神奈川か、なぜ知事か、なぜ長洲か）

九月七日、長洲さんの意を受けた安東仁兵衛さんからの緊急連絡で横浜のホテルに集まった経済分析研究会（代表・井汲卓一東経大学長、今井則義法政大教授、長洲一二）のメンバー有志（富塚文太郎・東経大、竹中一雄・国民経済研究協会、力石定一・法政大、森田桐郎・東京大、正村公宏・専修大、佐藤経明・横浜市大、佐原洋・東海大、安東仁兵衛・「現代の理論」、久保孝雄・労働調査協議会など）や長洲さんの教え子有志（岸本重陳・横浜国大、富山和夫・関東学院大など、いずれも所属は当時）にも「三つのWhy」を提起しました。

初めは出馬自体について賛否半々の状態でした。「学者として全うすべし」の正論から、「やるなら東京都知事」とか、「政治をやるなら国政に出るべし」までいろいろな意見が出ました。しかし「なぜ神奈川か」「なぜ知事か」を議論しているうちに、「神奈川は日本の縮図であり、神奈川で日本の問題を解くことが重要だ」ということになり、「知名度が高く、弁舌に長け、ソフトな人柄で女性の人気も高く、知事職に適齢でもある長洲さんなら勝てる」とする意見が多数を占めていったのです。私は初めから出馬積極論で、「県民からの召集令状ですよ」とまで言って、長洲さんに迫りました。国政の閉塞状態を打破するには、自治体改革をつみ上げていくしかないと考えていたからです。この日のメンバーは後に長洲さんの政策づくりにも参加してくれました。

一九七四年一〇月二八日、正式に立候補を表明し、翌年四月の知事選に出馬した長洲さんが、選挙スローガンで「神奈川が変われば日本が変わる」と訴えたこと、知事に就任した長洲さんが神奈川を「日本の縮図」ととらえ、「神奈川で日本の問題を解く」ことを自らの政治課題の中心に据えたのは、こういう経緯があったからです。

### ●神奈川で日本の問題を解く―「神奈川が変われば日本が変わる」

たしかに、当時の神奈川は政治、経済、社会のあらゆる分野で転換点に立っていました。七三年のオイルショックを経て高度経済成長が終わり、七四年に戦後初のマイナス成長を記録するなど、低成長時代への転換が始まっていました。七〇年代から八〇年代始めにかけて、世界最強を誇った日本の製造業をリードしてきた京浜工業地帯は、国の工業分散政策とアジアの急速な工業化でしだいに競争力を失って七〇年代半ばから「空洞化」が目立ち、脱工業化社会への転換を迫られていました。

産業構造が急激に変化し始め、衰退する重化学工業に替わって電機、自動車などの組み立て産業、

さらに軽薄短小と呼ばれた先端技術産業が興り、従業員もブルーカラーから知識・技術労働者に重心が移ってきました。高度成長期に成長の成果配分を争って大きな成果をあげてきた労働組合は低成長下でしだいに力を失い、市民運動も公害、環境問題から福祉・医療、教育、女性、障害者問題などへとより多様化し、抗議・要求型から参加・提案型に変わり始めていました。

政治的にも、国民の「中流意識」の増大とともに無党派層が急増し、棄権率が高まるなど、これまでの工業社会型政治・政党システムが揺らぎはじめ、高度成長期の圧力団体政治から脱工業社会＝知識・情報社会型政治への転換を迫られていました。明治いらいの悲願だった欧米へのキャッチアップ過程では有効だった中央集権型政治・行政システムも、七〇年前後の悲願達成とともにさまざまな分野で機能不全を起し始めていました。

社会的には急速な高齢化が進む一方、地方財政のひっ迫で、財源が豊かだった高度成長期の「御用聞き行政」や「ばらまき福祉」が見直され、配給型から参加型福祉へ、画一型からよりきめ細かな地域福祉への転換が課題になっていました。生徒急増による高校不足や教育現場の荒廃など、教育問題も深刻化していました。また、沖縄に次ぐ基地県として、厚木基地の騒音被害や横須賀基地の原子力艦船の母港化など、日米安保の矛盾が重くのしかかっていた。

このように、当時の神奈川には大型の課題が山積していたのですが、それはそのまま日本の課題でもあったのです。むしろ日本の課題が神奈川に凝縮して現れていたといいでしょう。まさに神奈川の問題を解くことが日本の問題を解くことにつながっていたのです。こうした神奈川認識が長洲さんの使命感をかきたて、知事選への挑戦を決意させた大きな要因になっていたと思います。